令和五年三月
大学院文学研究科

眞有　澄香　提出　学位申請論文

『伝統としての〈ことば〉鏡花とみすゞ』

審査報告書

國學院大學

眞有　澄香　提出　学位申請論文

『伝統としての〈ことば〉　鏡花とみすゞ』審査要旨

論文の内容の要旨

眞有澄香提出の『伝統としての〈ことば〉　鏡花とみすゞ』は、これまでの研究業績を総合的に捉え直したものである。第一章「文学研究と国語科教材」は、「明治初期における子ども読み物」、「学校教育と言文一致運動」、「「読む」という行為」、「虚構性の向こうへ――「白いぼうし」」の四編から成り、明治期の子ども読み物がその内容を知育、徳育へ強化され、徐々に国家的イデオロギーを背景にした国定教科書へと移りゆく展開にあって、教育界においても文語体から口語体への改革を推し進めた言文一致運動の潮流が深く関わっていたことを論じる。また、教育の中の「読み書き」の教材として流布した子ども向けの副読本資料の分析から、文学教材の成立とその機能を論じ、国語科教材研究と

文学研究の架橋を提案している。さらに、その具体的な事例として、あまんきみこ「白いぼうし」が、昭和四十六年から今日まで小学校四年生用国語科教材として定着していることに注目し、これまでの国語科教材研究においてどのような変遷を経てきたか、それを踏まえてどのような授業実践がなされてきたかを批判的に考察し、特定の登場人物が示す人間性をテーマとして読むことよりも、作品を構成する一語一語の背景にある伝統文化の意味づけを掘り起こしていくことを試みる。そして、享受者の言語体験を拡張する可能性を、このファンタジー教材の特質として指摘する。

主な研究業績の一覧で明らかなように、日本近代文学研究の領域内において、泉鏡花の作家・作品研究に継続的に取り組み、その成果は著述として刊行されている通りであるが、その論点であった「呪詞の形象」という、いわば民俗学的な言語論を踏まえた考察は斬新な成果を提出したものであった。本論文の第二章「泉鏡花の文学世界」は「「学校の新しい生活様式」――「外科室」」、「初等教育を視座として――「義血侠血」」、「伝承土壌としての日本海――「照葉狂言」」、

「鏡花文学における怪異と表現法」、「明治文学の成立基底に関する一考察―「化鳥」」、「「地妖」と「囃子」と「角兵衛獅子」―「春昼」「春昼後刻」」、「童唄を中心に―「草迷宮」」、「「国語」から「文学」へ―「夜叉ヶ池」」の八編にまとめられ、各作品研究の問題提起は、まさしく前著の論点をさらに展開したものであり、各作品の成立事情やその言語的編成の仕組みを民俗学的な知見を援用しつつ読み解く方法を主としつつ、泉鏡花の教育環境のあり方まで踏まえて各作品の言葉の指向性を浮き彫りにしようとする試みである。こうした考察の成果の一つとして、鏡花作品の基底にあるとされる〈怪異性〉と〈幻想性〉という評価について、前者は異界への畏敬の念に、後者は亡母憧憬に、それぞれ端を発するとしている。さらに、鏡花文学におけるその表現技法の分析課題として「口語体」の創出を、単なる会話体の応用ではなく、作品構造の特異性とも関連して、具体的な発話を再現する方法の模索と捉えている。そして、こうした鏡花文体の特殊な有り様を、「声」や「ウタ」を作品内に登場させ、作品内容として中心的な役割を持たせつつ、実は、ことばの意味を確定し、表現内容

を確認していこうとするような読解を解体し、ことばの意味そのものを無化することで、逆に読者の「共感」を増幅する効果があることを指摘している。

第三章「みすゞ詩と現代」は、「〈ことば〉の習得」、「「故郷」の仮構」、「みすゞの内景」、「ホリスティック理論と音数律」、「愛唱（誦）歌としての可能性」、「海洋史観との共鳴」の六編から構成される。若くして童謡詩人としての才を見出されるも夭折した金子みすゞの詩作のプロセスを主として考察し、日常生活における言葉の発見が詩作品として整序されていく動きに焦点を当て、そこにみすゞ独自の創作の方法を見極めようと試みるものである。まず、みすゞ詩の特質として音楽性を挙げ、「音数律的リズム感」としての「七五調」を指摘し、これを日本近代詩における口語自由詩運動との関わりを踏まえて分析するのは新視点を切り拓こうとする試みと言える。また、そうした詩に内在する音楽性、「七五調」が読者に対して、伝統的な言語上のリズム感を想起することを促し、日本古来の詞章の持つ力を呼び覚ますような働きをするという仮説に基づき、折口信夫の「日本文学の発生序説」において発想された、いわゆる言霊信仰を

背景にした「生命標」（詞章の威力を発揮するもの）を手がかりにしつつ、みすゞ詩の現代社会への問題提起や強い説得力について考察している。さらに、あらゆる事象との関係論的な思考を提案する「ホリスティック理論」を参照し、みすゞ詩の「いのち」と「つながり」を喚起する力を把握しようと試み、また、このあらゆるものとの連続性とその拡がりを指向する特性を、金子みすゞが生まれ育った海浜の光景に見出せるとして、国境で分断された歴史観ではなく、海のつながりにおいて世界史を発想する「海洋史観」との「共鳴」を指摘するものである。

本論文を一貫する論点は、近代の教育論、国語教育論への取り組みが進められた成果と、細分化された近現代文学研究の方法論への批判的な姿勢との二つが融合し、近現代文学研究と文学教育研究を横断的に論じる視点の提案にあり、この視点の先に、作品表現における日本語の伝統的な姿や力を、古代からの連続性として掘り起こそうとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文の出発点をなす大きな構えは、「まえがき」中に詳細に記されているところであるが、従来の近現代文学研究がともすれば陥りがちであった、作家・作品研究の個別的な考察がさらに深まったが故に、それぞれの研究を連携させる視座を喪失してしまったこと、また、この三十年ほどの時間のなかで、多様な研究理論が次々と導入、消費され続け、そこから導き出される研究成果の多様化によって、「文学」を読むことの豊かさ自体が拡散されてしまったこと、そして、論者のもう一つの研究領域である文学教育研究との乖離を憂うという思いから構成されている。そこで、発想されたのは、「「文学研究」には、豊穣な近代文学を横断的に論じる方策、方法論が提示されていない」という問題意識であった。しかし、本論文は、改めて大きな枠組みの新研究理論を創出しようという野心を表明するわけではない。文学の原点に帰り、その作品を形作っている〈ことば〉との出会いを確かめ、作中の〈ことば〉たちが「背負ってき

た伝統やその継承の有り様を確認する作業」を通して、作品表現の奥行きを多義的に読み込むことを徹底しようという極めて地道な努力を提案するものである。こうした本論文の問題提起が全体を貫いていることを確認し、各章ごとの批判検討を行った。

第一章の「文学研究と国語科教材」は、近代文体としての口語体が、それまでの文語体からどのような過程を経て成立していったのかを、近代文学史上の運動のみに依拠せず、いわば文章作成作業の原点ともいうべき初等教育、明治初期における近代学校教育制度において使用された翻訳物や民間の教育用読み物、特に女子教育の「修身」教育用に使用された『女子修身美談』（明治二十七年）等に注目し、女子の徳目の啓蒙を内容としながら、これらの読み物が徐々に口語体、談話体を採用することが多くなっていくことを論じる。つまり、いわゆる文壇における言文一致運動と並行して、初等教育での口語体習熟の運動が見て取れるということは、明治期の文体成立事情にとって重要な指摘である。また、小学校令（明治二十七年）以来の「読み書き」が、教室の中で

どのような人間形成を果たしていたかを追究し、学校教育現場における読書が子どもの情操教育の一環として機能していた点を踏まえ、現在の教育現場における読書のあり方を批判的に考察し、「読む」とはどういうことか、「読解力」とはどういう力を言うのか、それは教育に必要なのかを問うことへ繋げている。そして、現在の小学校用国語科教科書で定番教材化している、あまんきみこ「白いぼうし」の教材研究史を検討し、授業におけるテーマ読みに偏った指導方法への疑念を表明しているが、ここで論者が実践しているのが、作品のことば、「字句」に立ち返り、読者の想像力を喚起する一語一語の意味を、歴史的、伝承的な意味にまで掘り下げていき、結果として、この文学教材が持つファンタジー性とでも呼ぶべき可能性を押し広げる読みを提案している。このように語彙レベルの探索作業を授業実践へ展開させようという試みは、過度な語釈における意味の拡散化という危険性は孕むものの、国語科授業の中に文学の豊かさを活かすという発想の有効性を示唆していると言えよう。

第二章の「泉鏡花の文学世界」は、およそ八編の作品研究から構成されてい

るが、それらを導いている発想が「ことばの力」への注視であり、それは現代社会における教育の根源的な課題追究に必須な問題提起であるとしている。すなわち、作家としての生涯を日本語の表現に捧げた泉鏡花作品において、この「ことばの力」を検証することが一つの提案になるという見通しが本章のテーマをなすと言ってよい。そのための分析方法とは、「鏡花がこだわり抜いた「日本語」を民俗学的な発想から丁寧に読み解く」ことであり、それは「鏡花文学に内包された、古代へと遡行する深遠な文学世界に近づこう」とする試みであるという。このような視点に立った考察は、「外科室」を論じて、その「下」に現れる「躑躅の花」や「藤色」を取り上げ、その民俗学的、文化的な意味を探りつつ、その「ことば」に付属する文化的イメージが、「上」におけるクライマックスを支える機能を見出すところ、また、「照葉狂言」において「ザシキワラシ」、「枕返し」の「民譚」を透かし見るという視点を提案し、さらには泉鏡花の文学世界を表現する〈怪奇〉や〈幻想〉というキーワードの淵源を、幼くして彼岸へ去った母への思慕と、生育環境であった金沢の故郷を包んでい

た自然の特質の中に求め、それらが相俟って「異界の存在への畏敬の念」や「亡母憧憬に端を発する母恋いの情念」を醸成したと考察するところにも民俗学的知見が豊富に援用されて示唆に富む。また一方で、鏡花文学における「口語体」創出の問題を、「化鳥」を通して論じ、その文体や時間等の「揺らぎ」を指摘するが、「口語体」との関係がどうかまで深めて欲しいところである。さて、本章の分析手法が最も効果を上げたのが「草迷宮」を論じる際に、口承文学研究における「ウタ」概念を導入した考察であろう。「音楽性が強調されればされるほど、それに反してことばの意味は無化されてしまう」という発想は、作品に組み込まれた言語表現それ自体の前景化を促すという意味で重要な指摘であり、これが次章の金子みすゞ詩の考察への接続を準備するものだとも言える。

第三章の「みすゞ詩と現代」は、そのタイトルの示すように、未発表のまま残された金子みすゞの詩の表現について、これが「つながり・かかわり・共生といった現代社会が抱える」諸問題を掘り起こし、社会が進むべき針路を見通す可能性を拓こうとした試みであるとして読解しようとするものである。まず

は、金子みすゞがその童謡詩の数々をどのような生育環境において育んでいったか、詩の成立に関わる要件としての故郷、仙崎村での経験が詩の表現へ昇華されていった経緯などを詳述する。そして、愛児「房枝」が発する〈ことば〉を採取した記録の分析において、幼児にとっての〈ことば〉の発生が身体の成長とともに展開していく過程を示しつつ、日常言語と詩的言語の機能についての考察を喚起するという視点は新しく、優れた問題提起であろう。さて、「ホリスティック理論と音数律」と題された論考は本章中の論点の核心部であると評価する。みすゞ詩の強い表現力の起源が、「音数律的なリズム感」にあることに着目し、詩の表現に内包された「音楽性」を分析し、それを「七五調」にあるとする。明治末期に口語自由詩の完成を目指した詩壇の動きとは一線を画し、実は「日本人の琴線」を揺り動かす力が定型詩の「七五調」に内在していることを、みすゞ詩が告げているとする。その傍証に折口信夫の学説を参照しているが、しかし、この伝統的な「音数律」の機能分析がみすゞ詩の表現性を支持し、人間と自然、そして宇宙との関係論的な思考を準備しているとする点

には、さらに多くの言語論的な考察が課題となるだろう。また、みすゞ詩の関係論的思考への促しを、「海洋史観」を参照しつつ「海」における生命のつながりとして解読する提案も、みすゞ詩における「海」のイメージの、詩的表現レベルのさらなる分析を俟ちたいところである。

本論文は、国語教育研究と文学研究を接続させ、国語科教材としての文学作品の、表現の仕組みとしての日本語を再確認し、伝統的な意味を担いつつ運用される〈ことば〉の重力を慎重に測ることを以て作品表現の多様性を見出し、これを教育にも活かそうとする果敢な試みである。そしてこれを、近現代文学研究の事例として、泉鏡花作品の考察と金子みすゞの詩作品の考察を通して実践したものだが、分析の方法として依拠した民俗学の学的成果を応用するところ、確かに〈ことば〉に付着した民俗文化的イメージの掘り起こしは共感するところである。しかし、民俗譚を近代文学作品の深層に見ることはその話型を範として固定化する傾向があり、より精密な表現分析が必要となろう。さらに、鏡花文学とみすゞ詩を接続させて考察するという重要な問題提起はなされてい

るが、今後、その具体的な論考の提出に期待したい。

以上の理由から、本論文提出者眞有澄香は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

令和五年三月九日

主　査　　國學院大學教授　　石川則夫

副　査　　國學院大學教授　　井上明芳

副　査　　宇都宮大学教授　　鈴木啓子